

「相中相高百年史」より  
( 戦時体制下の相馬中学校 8 )

8 学徒動員：五年生（相中第43期生）・・・ペンをハンマーに

② 春光寮（福島日東礦工業敷地内）での生活

汗と油にと埃にまみれての重労働と同様に毎日続く空腹感もまた苦痛であった。毎日の食事は、大豆やじゃがいもなどが大量に入ったご飯が丼に軽く一杯、それに野菜汁に漬け物程度でまさに一汁一菜。魚類はお祭りや祝日などに添えられたただけであった。

食券制度だから一回の食事に二枚、三枚と切るわけにもいかず、炊事場の大きな釜に湯気をたてているご飯を横目に見ながら食い足りない気持ちを我慢して食堂を出たのであった。

玉川晃<sup>(※1)</sup>の日記には

「いま五分、いま三分、いま二分……。ガン、ガン、ガンと鳴り響く昼食の鐘が待ち遠しい」（8月14日）と記されており、いかに空腹に耐え、食事の時間がくるのを待ちわびながら働いていたかを如実に物語っている。

橋本行正の懐旧談をひとつ紹介しよう。

「毎日の食事不足でいくらかやせてきた八月末の日曜日、工場に近い信夫橋の南袂にあった山口屋食堂の主人（徴用で同じ職場に勤務していた）から同班の級友とともに招かれた。

閉店して我々を二階の座敷にあげた主人は「今日はどうどんを食べられるだけ食べろ…」と言い、うどんの入った丼を出しはじめた。確か味噌タレの中に小さな肉片が二つ三つ入ったうどん丼だったが、味は極めてよく、そのうまいこと！またたく間に五杯を食べてダウンした。最多はS君で九杯たいらげ、我々を驚かせた。毎日ひもじさに耐え続けていただけに主人はまさに地獄に仏で、心から感激した。いまでもあのうまさ満腹感は忘れることはできない…」

この山口屋の主人には佐藤庄次郎や私たちの班員も招待され、うどんを腹いっぱいご馳走になって帰寮した。我々の殆んどは肉片の入ったうどんなどは生まれて初めて食べたうえ、空腹だったので橋本らと同様、そのうまさにびっくりしたのであった。

思い起こすと山口さんの人情味溢れる温顔と餓鬼のように黙々とうどんを食べつくした遠い日のことが臉に浮かんでくる。

このような飢餓状態の時、同じ職場に自宅から通勤していた飯坂高女（現福島北高）卒の女子挺身隊員から昼休みなどにそっと珍しいさくらんぼやリンゴなどを手渡され、級友と分けあって食べたこともあった。これも本当にうまかった。

…… 略 ……

寮生活はつらい中にも楽しさもあった。朝6時起床喇叭で飛び起き、廊下に並んで点呼を受ける。このあと洗顔→朝食→朝礼と進み、朝礼では引率の先生の訓示や工場幹部の作業上の注意があり、時には士気高揚のため軍人勅語と戦陣訓の奉読や学徒動員歌、「ああ紅の血は燃ゆる」の合唱、軍歌演習を行って作業に入った。

夕方は5時過、疲れ切って帰寮、夕食後入浴し、6時から勉強に入る。聖堂で数回の授業を受けただけで、あとは自習だった。机は一部屋に一つか二つきりなかったのでふとんの上にあぐらをかき、教科書を読んだ。

しかし、若者の集団であるからたまには雑談に耽り、女学生や女子挺身隊員の噂話で部室の中から突然爆笑が起り、舎監の先生から大目玉を食らった班もあった。

こうして点呼ののち 10 時の消灯喇叭が響きわたり就寝。その後中には工員からもらったタバコを吸う者もいたが、見つかっても先生の厳しい詮議や体罰は殆んどなかった。当時学生の喫煙は厳禁だったが、先生も明日の生命さえ分からない我々の暗い運命に憐憫の情を持ち、寛大になったのだろう……と胸中を推察したのであった。

下着類に跋扈した蚤や虱にも悩まされ続けた。当時は衣料品や石鹼も不足し、汗と垢が沁みついた下着を長く着るからこれらの害虫が発生し、増えてゆく。暇を見つけては熱湯に浸したり、つぶしたりして絶滅しようと努めたが、全く絶えることはなかった。

また、インキン、タムシなどの皮膚病にも罹患し、昼休みなどに人影のない場所を探してこっそり、天日干しをして治そうとする者もいて笑い話のタネになった。

日曜には班員の父兄が面会に訪れることもあり、持参してくれたボタ餅やカキ貝ご飯などを分け合って、故郷の味に舌鼓を打った。

こうして寝食と苦勞を共にした級友たちの間は強い友情と団結心に結ばれ、ケンカなどのトラブルは殆んど起こらなかった。

(※1) 原町出身